玄洋社と頭山満

泉　賢司
Kenshi Izumi

はじめに

国士舘創立者柴田徳次郎と頭山満の間には深い関わりがあります。はじめは玄洋社と国士舘というタイトルで書こうと思っていましたが，頭山翁の資料を探っていくと，短い文章で書き表すことが出来なくなり，そこで第3回に分けて書くようにした。第1回は玄洋社と頭山満，第2回は国士舘と柴田徳次郎，第3回は頭山満と柴田徳次郎，という形に分けて考察することにした。

尚，人名の敬称は略させていただきます。

頭山満について

頭山満は安政2年（1855）4月12日に九州，福岡の城下，早良郡西新町に，黒田藩馬廻役の筒井亀策といそ子との間に，長女さき子，長男亀来，次男正次郎，についで三男乙次郎として生をうけた（玄洋者物語には音吉となっている）。しかしいつの頃か自分で鎮西八郎為朝にあやかって八郎と改名して15歳以前をすごしている。満に変わったのは乙次郎が15歳のとき太宰府天満宮に詣でに行ったとき天満宮の神額を見ているうちに直感が走り満という名に改めてしてしまうのである。気丈な母いそ子も，満のことをお前が半日でもよいから他人の子供のように有ってくれればと嘆いていたという。父，亀策はそれを聞いても，ほっとけと云うだけでとりあわなかったという。

頭山満が生まれた1855年頃は，江戸に火災が起こり，日本橋，浅草あたりは焼け野原となった。又，その年の10月には大震災が起こり江戸は大変ないたでをうけていた。そのような時にフランス艦隊が下田に現れたり，イギリス艦隊が函館に入港したり，ロシア兵が樺太に陣営したりという時代で，ペリー来航以来（1853）穏やかな世情ではなかった。ドイツもオランダもなんとか幕府に取り入って，自国の手で日本懐柔を納めようと必死であった。とくにオランダはその年の10月に幕府と親和条約を結んで国交関係を樹立している。安政5年（1858）には安政の大獄が起こり，吉田松陰も処刑されている。

筑前の地は風土的にも古く，黒田藩主長薄公は鹿児島の島津斎昭公の叔父に当たる人で尊皇攘夷をとなえていた。蒙古軍の侵略にも立ち向かった気風をもっていて，今

でも元寇に立ち向かう為に掘られた防塁（馬が落ちるように掘られた溝）がある，又，黒田節に知られる武士の豪気は人々の心を鼓舞した。満が11歳のとき生家の庭に1本の楠の木を植えた事があるが，これは日本の尊皇主義の現れでもある楠公への敬慕の念でもあったのか，後年渋谷の常磐松に住むときも桐の木を1本植えている。幼少のころの想いを一本の木に託しているのかもしれない。満は19歳のときに，母方の西小姓町の頭山家（頭山和中）を継ぐことになった。しかし，相手はまだ4歳の娘（蜂尾）の成長をまって結婚するとの約束で養子となった。満はこの時の事を友人に，俺は仙人になるから年なんか関係ないと云っている。結婚は明治18年満が31歳蜂尾が16歳の時となっている。満は12歳のとき古川友五郎という人の手習塾から，滝田柴城という人の塾に移っている。それから，当地では有力な亀井暘州塾に移った。亀井塾は徳川時代の官学である朱子学に対して儒学であった。亀井南冥とは親子で，その学風は筑前，北九州一円に知られた人物でもあった。福沢諭吉なども幼少時代手ほどきを受けている。満が17歳（明治4年）のとき高場乱（おさむ）（女傑）の主宰する人参畑塾（高場塾）に入門する。この高場乱という人も亀井塾の門下で気性の激しい人であったが，眼科医を営んでいた。満は「自分が高場塾に入門したのは，眼をわずらっていたので高場先生に診てもらおうと行ったところ大勢の豪傑どもが講義を聴いている，塾生の元気旺溢せる気風が大いに気にいってそのまま入塾することになった。」という記述がある。その時に知り合ったのが後に玄洋社の三傑の一人箱田六輔であった。

頭山　満（明治12年，25才頃）

満が高場塾（人参畑興志塾）に入門して4年後（明治8年）箱田六輔，武部四郎，越智彦四郎は（矯志社），（堅志社），（強忍社），という結社をそれぞれつくっている。薩摩の西郷私学校，高知の板垣立志社に習ったもので，その志も行動目的もみな同一であったと「玄洋社社史」に記されている。矯志社を武部小四郎が盟主として結成され，箱田，頭山も加盟した。矯志社は長州の前原一成に通じていた。前原一成は吉田松陰の生徒で，松陰は前原を八十，と親しみをこめて呼んでいた。前原は木戸孝允と意見が合わなくなり明治3年官を辞し，長州に帰り木戸を倒す画策をしていた。しかし，時の政府の実力者大久保利通らは私党の結成に対して警戒の眼でみていて，何かそういう噂でもあれば逮捕しようとねらいをつけていた。そういう矢先，頭山の家宅

が捜査された。そのとき大久保利通を斬るとの箇条文が見つかってしまうのである。明治10年（1877）の9月25日の出獄まで約1年半余りを牢人として過ごすこととなった。明治10年（1877）1月鹿児島私学校の生徒らが海軍造船所を占領し武器，弾薬を奪い，西南戦争へと発展していくが，西郷隆盛が陸軍大将として政府に尋問の筋ありとする名文もすでに時代の流れに逆らったかたちとなっていた。しかし，福岡県の士族のなかにも西南戦争に出兵する動きがあって，満の先輩にあたる武部四郎や越智彦四郎らも十一学舎なるものを設立して数百名を集めて戦いに馳せ参じている。しかし西郷軍の敗退とともに一同処刑されることになった。満は山口の牢から福岡の牢へ移されるが，西郷自刀の翌日に証拠不十分に無罪放免された。獄中にあったため難を逃れるかたちとなったが，母，いそ子が亡くなってしまった。後年，満は「監獄に行くことを志士の免状でももらいに行くように思っている奴どもに何ができるか。」と言っているが，生と死の場を体験し，又，その時に母をも亡くしたことを考えると，母の死に目に会えなかったことへの戒めの言葉だったのだろうか。

満は釈放されると十万坪余りの山林を元家老加藤経武から譲りうけて，開墾社を設立して材木を伐採し，又，農作業をしながら向浜塾を運営していった。塾には満の他奈良原至，進藤喜平太，来島恒喜，月成勲，大原義剛，宮川太一郎，達が塾生というよりも同士というかたちで集まっていて，全員が西南戦争で自刀した西郷隆盛の崇拝者たちであった。そのために大久保利通が東京の紀尾井坂で，島田一郎（石川県）らに暗殺されたことが伝えられると，一同は奮起し，満は，奈良原と共に土佐（高知）の板垣退助（立志社）のもとをたずねている。その目的は名望ある板垣退助を担ぎ出し明治政府の表舞台に立ってもらおうとの考えであった。その時板垣退助は42歳，満は24歳であった。満は，板垣に暴力だけに頼って国政を改革することは，天皇を一夫討の攻撃にさらすことになると聞かされて，少し考えが変わったような感がある。しかし，後年政策の違いにより板垣とは相対することになる。

満は，板垣と会って以来福岡に帰ってから民権論を唱えている。明治12年4月（1880）満は「向浜塾」を閉じて福岡本町に「向陽義塾」をつくり，政治結社として「向陽社」を同時に設立している。

この向陽社が玄洋社（明治14年2月）改称の前身になっている。

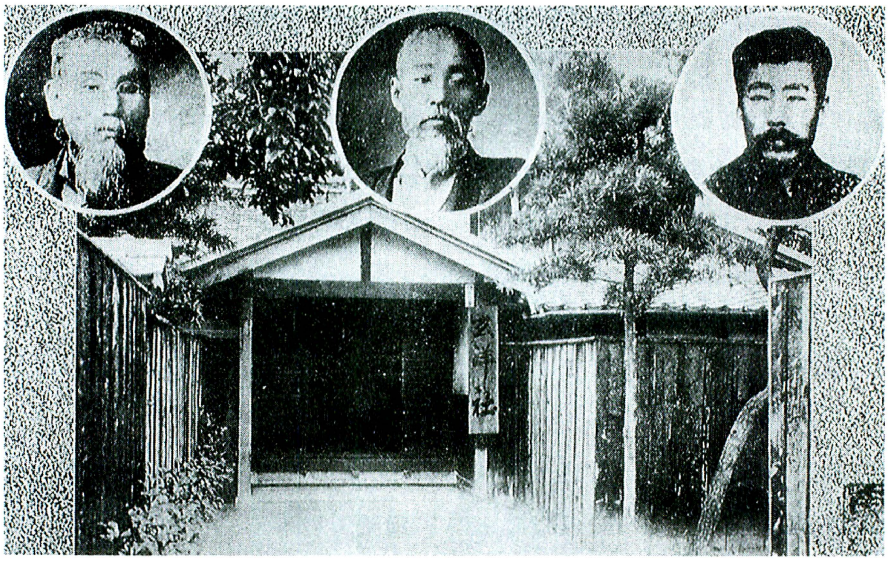
スタート時の向陽社のメンバーは

社長，箱田六輔，

監事，頭山満，進藤喜平太，山中立木，上野弥太郎，

議長，郡利，中村耕介，

副議長，樋口競，榊治人，



玄洋社（円内右より，箱田六輔，平岡浩太郎，頭山　満）

書記，林助，
会計，藤崎彦三郎，加藤直吉，となっている。又，教師は漢学に高場乱，亀井紀十郎，白井浅夫，奥村貞，などの他に，法律，英語にペレー（医者），アッキンソン（宣教師），と云う英人教師も招いている。塾生は300名ぐらいの青年達が集まったと云われている。

向陽社及向陽義塾趣意書

義務を以て成る，之を義塾と言う。義塾は則ち教育を以て民権を培養するの地なり。夫れ人義務を尽くすことを弁知して而して後国家の成立始めて共に期すべきなり。於此今吾輩同志と偕に国家の将来を思い，茲に此社を起こし，此塾を開き，其誓ふ所のものは，特に公同博愛の主義を以て厚生利用の道を実践し，先進の士は後進の士を誘導し後進の士は先進の士を翼成し，則ち国の成立を後先協同の間に期し，共に其知識を研究し，其事業を励み，惰手互に之を責め，奢互に之を戒め，遂に独立の元気を培養し，以て付帯天地に愧ざらんとす。語に曰く河海は岐流の漸，丘獄は塵末の積と。該社の旺盛を量る亦此意に出でず。苟も国家に志あるものは亦た能く社会相互の義務を弁知し，曩に来りて此社に投じ，協心同力，各自の精神を振発し，国家の成立に小輔するを期せんこと。然らば則ち人間の義務豈唯吾輩のみに止まらんや。以て名付けて公同博愛主義と言ふ。（明治12年）

西南戦争没後2年をへて，満は同士4名と共に西郷家を訪れている。その時に南州公，愛読の書「洗心洞劄記」という書を借りて読むことになる。ところがこの本を黙っ

て持ち出したものだから（沖伊良部に西郷何州流島以来親交のあったと言われる）川口雪蓬と言う男が，カンカンになって怒ったという。頭山はその噂を聞いて「私があの洗心洞劄記を拝借して持去ったことについて大変御機嫌が悪いようだが，私は洗心洞劄記の表紙を見るために拝借したのじゃない。ああいう本を只読まずに置いて何になるか，貸して効があるかないか黙って見ていたら宜しかろう」と云う手紙を出していた。二回目の薩摩入りの時に返しに行った時は，嬉しそうに笑って「いやあれは他人（西郷家）の預かり物でごわしたから御無礼をしました」と言って自分で写した靖献遺言と陽明文粋の二冊を頭山にあげた。「頭山満翁正伝」この本を書いたのは，大塩中斉天保八年（1837）民衆の生活困窮を政治の非として武装けっきして幕府の権勢に立ち向かった人で，その書の巻頭には「天は特上にある蒼蒼たる太虚にあらざるなり。石間の虚，竹中の虚といえでも亦天地也。いわんや老子いうところの谷神をや。谷神とは人心なり。故に人心の妙は天と同じである。聖人に於て験すべし。常人はすなわち虚を失う。いずくんぞこれを語るにたらん。」と人の道を説いている。

満は又，「靖献遺言」「離騒沙賊」「出師表」「読史述夷斉章」「移蔡帖」「衣帯中賛」「燕歌行」「絶命辞」などの書を愛読している。とくに洞斉の靖献遺言は青年時代に一字残らず暗記したと言われ，西郷南州，吉田松陰，藤田東湖，山県大弐，平野国臣を

玄洋社社員と関係者（明治 38 年頃）
前列右から 末永純一郎，杉山茂丸，進藤喜平太，内田良五郎，頭山満，福本日南，月成功太郎
後列右から 児玉音松，月成勲，的野半助，内田良平，大原義剛，古賀壮兵衛，武井忍助

崇敬していた。

満は，明治13年5月26歳で上京し，東京芝口の田中屋旅館に宿泊し，その後牛込左内坂に移る，その間6月10日から，東北各地を徒歩で漫遊しながら著名な士たちと会っている。水戸では（三木左太夫，斉藤甲斐）福島では（田母野秀顕，河野広中）盛岡では（鈴木舎定）青森では（広沢安任）弘前では（菊池九郎）酒田では（森藤右衛門）庄内では（松本十郎，松平権十郎）らと会っている。満は一日20里（約80キロ）歩くと噂されていた。

満が東京へ来てから実兄筒井亀来に宛てた手紙に「5月31日無事東京に着いたから安心していただきたい，思ったとうり東京は華美で軽薄でひどいもんです。」というような手紙を書いている。

玄洋社創設は，明治14年2月に向陽社を前身としたかたちで，筑前共愛会同志なども含めて創設された。場所は福岡市西職人町の海を望むことの出来る小さな2階建の家であった。このことから玄洋社の玄洋は玄界灘の海からとったのだろう。

社訓（玄洋社憲則）として，

第1条　皇室を敬載すべし。

第2条　本国を愛重すべし。

第3条　人民の権利を固守すべし。の三箇条からなっている。「右之条々各自の安幸福を保全する基なれば，熱望確護し，子孫の子孫に伝へ，人類の未だ此の世界に絶えざる間は，決して之を換ふることなかる可し，若し後世子孫之に背戻せば，純然たる日本人民の後混に非ず矣，嗚呼服膺す可き哉，此憲則　「玄洋社社史」

満は，玄洋社の中にあって，主として東京で生活するようになるが，社の運営は箱田六輔や平岡浩太郎，そして，三代目社長になる進藤喜平太らにまかせている。しかし，満は社の運営資金については金銭無視の精神とは別に実践家で，社員のために資金ちょうたつを行っていた。「その苦しい中から，六，七十名の血気社員を養うていかねばならないので，いつも頭山は火の車にのって，紙幣束をかき集めては米塩の料にあてていた。」「頭山満と玄洋社物語」又，年下ではあるが明治13年に上京のさい田中屋旅館で知り合った杉山茂丸のすすめで筑豊炭田を入手する。これをきっかけに多くの炭鉱を入手することになる。又，松脂油の会社をつくったり（すぐ失敗に終わる）。当時家賃が50銭，頭山の生活費が8円～10円位の時に玄洋社の借金が1万円位あった。そこで玄洋社社員の資金捻出のため経済活動にも奔走していた。頭山は当時を「玄洋社には軍人のようなのは幾らでもいるが，結城は鉱区を取りにやるとなかなか働く，杉山は金でも借りにやると実によく働く，玄洋社も裸体じゃあいかんからといって始めたのだ」と云っている。明治19年頃となっている。

安政元年のペリー来航以来，諸外国と結ばれた条約は神奈川条約，安政5年の日米通商条約，又，オランダ，ロシア，イギリス，フランス，ポルトガル，イタリア，ドイツ，などの国の他11ヶ国との条約が結ばれたが，その内容は日本国にとって不平等条約の色が濃かった。明治政府になってから，条約改正の動きは政府側も考慮していた，そこで明治16年以来鹿鳴館時代と呼ばれる社交外交が華やかになってくるのである。福島種臣，伊藤博文，井上馨たちはその急先鋒者であった。我が国の文化，建築，絵画，演芸，歌舞，音曲等すべてを捨てて，西欧文化を謳歌しようとする試みで，ついには日本語を英語に変えようと云うもの，又，西洋人と結婚して，我が国民の心身を改良すべしと云う物までもが出てきた。しかし，勝海舟の「時幣廿一ヶ条」，西村茂樹の「日本道徳論」にあるように，我国の国粋を保持すべきと云う考え方も少なくなく，頭山は勿論国体を明微にし，皇道を宣揚するは政府の責務と考えていた。しかし，列国は容易に改正には応じようとはしなかった。玄洋社はこのとき条約改正反対運動の方にまわり，頭山は，大隈重信（外相）に条約改正には断じて実現させないと答えていた。

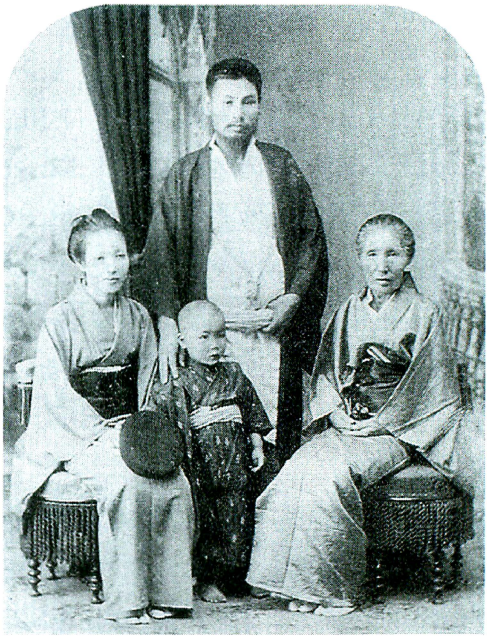
来　島　恒　喜

明治22年10月18日，このような政府のていたらくぶりに憤慨した玄洋社の来島恒喜が霞ヶ関の外務省の門の前で，大隈重信の馬車に爆弾を投げつけ，本人は自決した事件が発生したが，来島は，「其の要とするは，国威の失墜を未然に防止せんとするにあり。」と理由をのべている。一命をとりとめた大隈外相もひとまず改正実施延期をとらざるえなくなった。この事件により頭山は大阪で拘束されることになる。こうした事情をみると，当時の国士たちは，同じ国権論をとなえていても，明治政府には微妙な考えかたの違いが出てきていて決して屈従の立場ではない。

明治22年2月の憲法発布と教育勅語は明治政府の体制に大きく作用した。憲法は「帝国憲法は国家の大経を綱挙し君民の分義を明画す，意義精確，として日星の如し。文理深奥辞の賛すべきなし，此れ皆宏謨遠猷一に聖裁に由るものなり」と憲法義解に至った。教育勅語は，国民に対して一旦緩急当たり，義勇公に奉じ以て天壌無窮の皇運を扶翼するの道を宣示し給ひ，国民は今更の如く我が国体の尊きを仰いだ。来島の襲撃が大隈には大分こたえたみたいだ。しかし，藩閥と財閥は富国強兵をとなえ資本

主義体制を押し進め，貴族院も政府体制にはさからうことが出来ず，自由民権論は有名無実のかたちとなってしまった。

頭山は第一の維新は大政奉還，第二の維新は西郷決起，第三の維新は藩閥政治を解体し，広く人材を開発して国民的国家統一をはたすことだと考えた。頭山の外交に対する考え方は，明治5年の西郷南州の遠征論に発端がある，遠征論は軍隊をもって屈服させるようなことに誤解されているが，真相は自分一人で朝鮮に行き道理を言い聞かせ，平和的な東亜の協調にあった。頭山もその考えのとおり，朝鮮，支那についても「大東合那論」つまり日，那，朝が一つになり，ロシアの南下政策や，欧米の植民地政策に立ち上がろうと云う考えであった。頭山の思想系統は，儒教でこれに神仏を取り入れ日本精神を確立し，陽明学である（陰徳）修身斉家（陽徳）治国平天下の陽徳の方を取り入れた。此の観点から考えると後年板垣とあわなくなる要因は，板垣は現実的，理想的，雄弁宏辞，民衆を背景として天下を動かした。頭山は，一世を警策した。板垣は足下を見たが，頭山は百年後を見た，板垣は日本を見たが，頭山は東亜を観た。板垣は自由主義，頭山は国家主義，二人があわないのも解る。



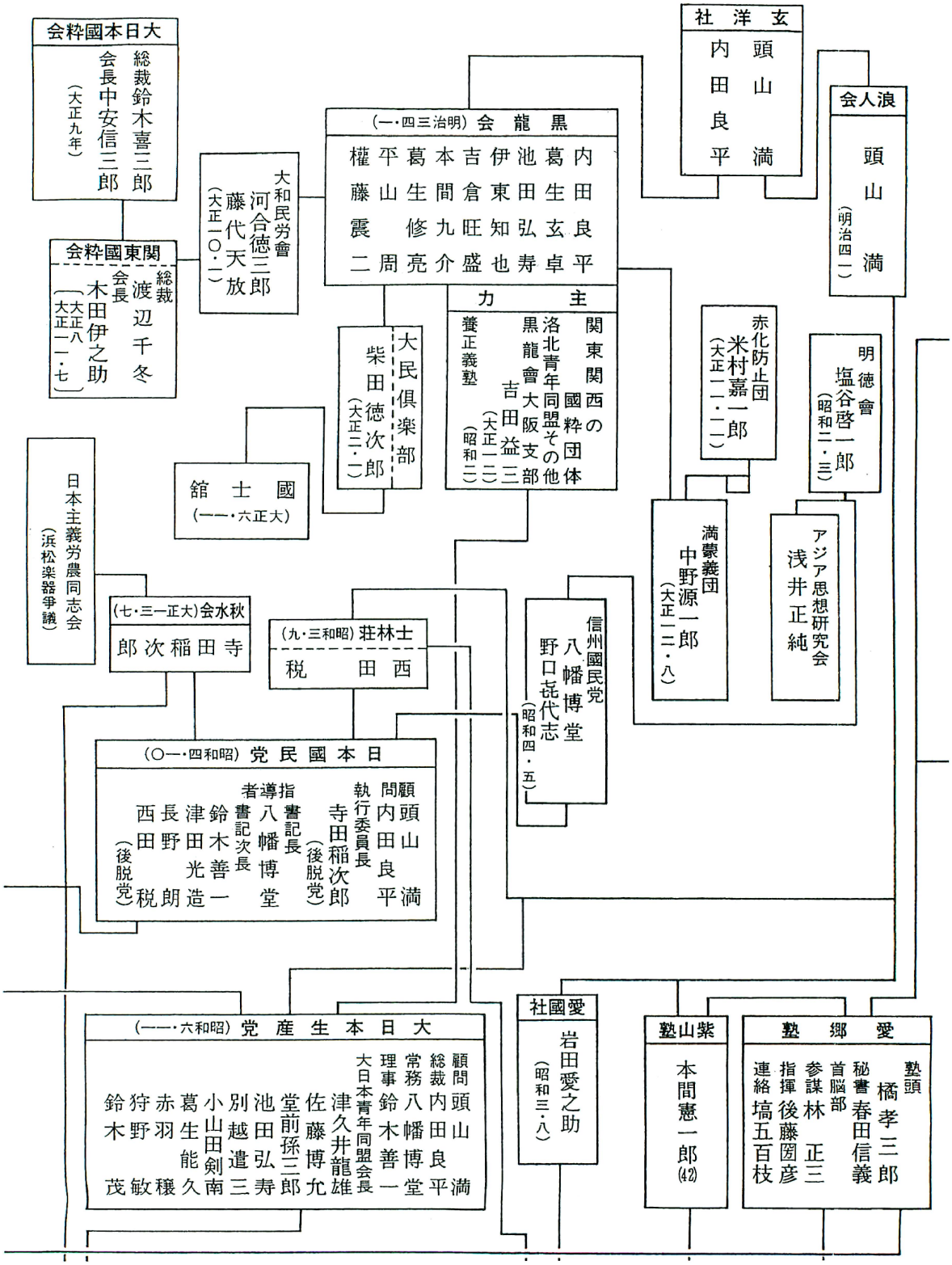
左より　峰尾夫人，長男立助，
進藤喜平太の母堂（明治28年頃）

頭山38歳明治25年東京芝櫻川町に家をかまえた，頭山全盛期とはうらはらに貧窮の生活であった。それは，頭山の人間的魅力にひかれ玄洋社社員以外にも国士浪人たちも頭山のもとに集まり資金の恩恵にあずかっていたわけで，炭鉱の収益は国士一党の資金に変わっていた。頭山が個人利益のために炭鉱事業に乗り出したと一時玄洋社社員から非難されたことがあったが，そうでないことが時間がたつと分かってくる。この貧乏する頭山に伊藤博文内閣の陸奥宗光外相は，南洋事業に参加させようと試みて代理として政治浪人岡本柳之介をたてて交渉にあたるが，頭山は金はもらってもよいが南洋へはいかないよと岡本にこたえたという。とはいって貧乏生活をしていても料亭へは行っていたようで，貧富によって生活の行動を変えるような人ではなかった。又，選挙大干渉の内相だった品川弥二郎が西郷従道らと国民協会を設立し頭山に入会をすすめた時，頭山は「およそ世の中の人は，やるといっ云ってやってのけるものもあれば，やらないと云ってやるものもいる。また

やると云ってやらないものもいるし，やらないと云ってやらないでとおすものもいる。自分は，やると云ってやらないものよりは，やらないと云ってやらないものをとるだけである」とこたえた言葉は有名である。

明治35年日英同盟が結ばれた。それは英国の政治的アジア政略の現状維持と日本の自律自衛の外交提携であった。この時頭山は44歳であった。大隈，板垣連合内閣は玄洋社の一党と頭山の行動を制限するためには，大臣に推薦することが良かろうということで仕官を推薦したが，頭山は「大臣は柄ではない」と云ってことわっている。広田弘毅が中学校を卒業してまもなく頭山の家を訪ねた時，「俺は役人と金持にはならぬことに決めている，両方とも人のなりたがるものだからな，国家というものは一つの大きな乗り合い船のようなもので，片方にきれいな花が咲いていたり景色が良かったりすると皆その方に集まり，ために，船は傾き遂には転覆する。だから俺はいつも人の行かぬ側の舷に頑張って船を傾けないようにしたいと思っている」「頭山満翁正伝」と語ったという。功名心に明け暮れる政治家になるような男ではなかった。明治藩閥内閣が民権政党政治を無視したことに腹を立てて「無血中の陳列場」と憤慨文を出して議員をやめてしまった中江兆民も「一年有半」の著書の中で，「頭山満君は大人長者の風有り，且つ世の中の，古の武士道を存して全き者は，独り有るのみ，君は言わずして而して知れり，けだし機知を朴実に萬するものと謂ふ可し」と頭山満を評価している。

明治36年（1903）総選挙で政友会が193議席をしめた。そのころロシア帝国は南下政策を露骨にだしてきた，満州撤兵の言明約束を履行しないばかりか，逆に奉天，営口の軍隊も増強しはじめた。その野望に清もやっと気付きはじめ，又，日本も三国干渉以来，大国の制圧に耐えに耐えてきたが，このまま座してロシア帝国の勢力下になるか，決起して決戦に活路を見いだすか意見が二つに別れていた。伊藤，山県たちは日清戦争の直後からロシアを意識して，日露議定書（明治29年）を結ぶなどして苦慮していた。頭山はこうした状況下を玄洋社，天佑侠などを通じて満州，朝鮮の内情を知っていたし，内田良平によるロシア情報もつかんでいた。そしてアジア民族の自衛と日本国家の自立のために，対露開戦を望んでいた。玄洋社三傑の一人，平岡浩太郎の甥にあたる内田良平は単身シベリアから帝制ロシアに入り，広瀬武夫（海軍武官）や同郷の明石元二郎（陸軍軍人）とも会って，ロシア情報を入手している。内田の「露西亜論」によれば，「何となれば，君子民族は祖先以来三千年，人類領土を蚕食するものにあらずして，人類に依ってその生活を経営するものなり。此国民をして，永遠此愛すべき風土に独立を全ふせしむるの天意，亦必ずやここに存せん。されば吾人の人道の前に於いては，スラブもチャイニーズも，吾愛児として均しく之をむ　育



出典「愛国団体一覧」1933年頃より

するの責任を負わざるべからず」「正々堂々，人道を以て大陸一帯の大掃除を行はざるべからざる也」と内田良平の思想の一端が伺える。又，梁啓超，孫文などの日本亡命者達には人道支援をすると云っている。そして内田良平はロシアから帰国すると，頭山満を顧問に迎え，黒竜会を結成することになる。

頭山は，（明治 35 年）国民同盟会を解散した後に（明治 36 年）対外硬同志会を結成し，その年の 8 月には早くも対露同志会と改称している。そして戦うべきか戦わざるべきか苦慮していた伊藤博文に，対露同志会の主要人物である頭山は佐々木友房，神鞭知常らと官邸に伊藤博文を訪ね，「国家興亡の方寸はあなたにある」と圧力をかけている。又，対露同志会が伊藤博文に宛てた警告書には，つぎのように書かれていた「対路時局の宜しく定むべくして久しく定まらざるは，伊藤候らが当局者を掣肘するがためなりとの説は，実に国民をして疑慎憤慨に禁えざらしむ。吾人は憲政の大儀より思考して，その訛伝なるべきを信ぜんと欲す。然れども候等がしばしば閣議に参じ，閣員と往来するの頻繁なるを見れば此説起こる，又決して謂われなきに非ず」すなわち，伊藤候が国是の断行を鈍らせ，百年の大計を誤る罪は容赦しないといった強硬な文であった。又，桂内閣の前々期（明治 31－33 年）の外相（青木周蔵）に「死中に活を求めよ」と進言してきた。このこともあり，伊藤は国家存亡えの条理は開戦しかないと決断した。伊藤から山県え宛てた手紙に「実を秘し間髪を容れずに行動にふみきる。」と書かれている。頭山の力がうかがえる。又，対露同志の霞山近衛麿篤が日露開戦前に亡くなり，出資者が押しかけて来たときに，頭山は，全員を近衛家に集めて，憂国の士達も頭山を強く支持し又，頼りにしていた。

満州義軍出発に際して，中央頭山満（明治 37 年 5 月）

明治 36 年 11 月日露戦争の前年，頭山は大陸雄飛を志す青年達を集め，外務省と相談しながら満州義勇軍を編成した。その任務は「支那の独立を擁護せんがため」となっ

ているが，ようするに対ロシアにたいする特殊任務であった。

明治3年（1904）日露戦争は朝鮮の仁川沖，旅順のロシア艦隊攻撃に始まった。ちょうど今年で100年をむかえる。第三軍の乃木希典軍は旅順攻撃のため，203高地を占拠しようとしたが莫大な戦死者を出しつづけ自分の息子二児を失った。しかし戦い続けやっと明治38年元旦に旅順をおとすことができた。後年乃木希典は，明治天皇崩御の後を追い「うつし世を神さりましし大君のみあしとしたいてわれはゆくなり」と辞世の句を残して自刀した。又，その後を追って夫人も殉じている。しかし，奉天の開戦で勝利した日本軍は，まだロシアの誇るバルチック艦隊のウラジオストック入港を阻止しなければならなかった，東郷平八郎連合艦隊（司令長官）ひきいる連合艦隊は5月になってようやく，地中海・スエズ・インド洋・南支那海・対馬海峡に入ったのをみて対馬沖での海戦となった。戦いは日本連合艦隊のバルチック艦隊の大半を撃滅して大勝利に終わった。頭山は政治家ではないが，日露開戦論者であったからこの勝利は玄洋社と頭山の立場を高くした。しかし本人はその名声とはうらはらに茫洋（ぼうよう）とした生活ぶりで，国家が安泰であればそれで良いというような考えであった。又，このころ株に手をだして失敗したという話もある。又，日露戦争の後，北海道の夕張炭鉱を三井に売却している。しかし金銭度外視の人間頭山は右から左へと消費し，残ったのは，赤坂霊南坂上の家を入手したのが唯一だった。この事からも頭山が一介の成金者ではないことが伺える。当時も頭山の莫大な金の取得とその消費は話題にされている。「頭山立雲の曽て炭山を作って百万金を獲るるや，悉くこれを故旧に散じて，一年ならざるに裏裸全く空しく，剰すところ一軒の陋屋と一局の基盤のみ」と雲間寸観に書かれている。雲南坂の頭山の家には借金の後始末，寄付，運動費，記念碑建立，社会事業，満蒙問題などを口実に金を貰いに来てた，頭山もそういう連中にみな散らしてしまったという話である。「近世快人伝」後に残ったのは借金と書生だったという話である。

明治38年9月，孫文，横興，宗教仁，章太炎らの中国革命同盟社（秘密結社）が結成され，日本側から，革命評論社同人，宮崎滔天，末永節，菅野長知，北一輝らが参加している。頭山は，孫文を知ってから，アジア主義中国革命に協力を惜しまなかった。有隣会のち善隣同志会（明治44年12月発表）は後年辛亥革命勃発に際して組織され，メンバーは頭山満，犬養毅，平岡浩太郎，美和作次郎，宮崎滔天，内田良平，らが名をつらねている。日露戦争以後，政府の産業経済復興と，軍国主義国家建設方針はいっそう強くなっていく，いわゆる富国強兵政策である。

明治40年7月伊藤博文は韓国統監になり，韓国総理，李完用との間に協定が結ばれた。第一条「韓国政府ハ施政改善ニ関シ統監ノ指導ヲ受クルコト」となっており，

内田良平，武田範之らが動いたとされ内田良平はその幕僚になっている。しかし内田の本心は「日韓併合」よりも「大東合那論」を説き伊藤博文に勧告している。「大東合那論」とは，「我が日韓両国は，その土は唇歯，その勢は両輪，情は兄弟と同じく，義は朋友に均し・・」と前置きしその合那は日本からみても朝鮮からみても兵を用いることのない平和的利益事業であると云っている。伊藤博文が，ハルピン駅で暗殺された後，曽禰荒助に継ぎ寺内正毅が統監になり，明治43年8月22日に（1910）日韓併合が正式に調印された。日韓問題に関して頭山は「孟子にも，之を取りて燕の民喜べば取るべしと言うことがある。日韓を併合することに由って全道二千万の民が喜びを以て之を報ゆるものならが差支もない。然るに日本の政治家なるものは，日本の国民すら喜ばせる方法を知らぬではないか。まして韓国二千万の国民は皆悲憤反対している。それにも拘らず強ひて之を併合して，我国の馬鹿政治家に任せた位ではとても韓国の民を喜ばせ信頼せしめることが出来るものではない。」と言って，日韓併合には内田良平と同じく不満をもっていた。

明治41年～44年ごろに浪人会が生まれている。メンバーは頭山満，三浦梧楼，が顧問で内田良平，田中舎身，小川運平，大原義剛，柴田麟次郎，中村六蔵などとなっている。このころになると支那問題に加えて米国の排日問題等が出てくる。明治44年10月10日（1911）辛亥革命が大陸で発生すると，頭山は上海え行っている。（明治44年12月）以前から孫文らとアジア問題で話し会いながら「大東合那論」で合意していることもあった。

明治45年7月明治天皇が崩御された。頭山は「不動如山」「一以貫宇宙」，の信念で生きてきているが，崩御の時は山県有朋，井上馨，松方正義，桂太郎らに憤りを表している。「俺は先日陛下の御病気御危篤なりしより以来，侍医局宮内省，否更に遡って当今の元老等に対し満腹の不平があるのだ・・・・」と言い，「殊に天眼に咫尺して今日の如き御懇実篤」なる御詔勅を拝せし元老等は，一層責任を感ぜねばならぬ。・・・・」伊藤，松方，井上らには欧化主義の浮薄者であり，侍医にあんなものを置くとはなんたる始末だ，と朝日新聞の記者に述べている。

明治44年辛亥革命が勃発する。この革命は，異民族の清朝の支配からときはなされた民族革命であって階級革命ではない。日本の国士達も中国人の革命家達を支援してきた。黒竜会の北輝次郎は記者とゆうかたちで革命に参加協力している。頭山も上海え行って，中国民族の自立と動乱を見ている。頭山が上海え行った理由は「右につき有隣会の某有力者はいわく，頭山氏の渡清は別に時局がどうこうしたためというものではない。かねて米国から帰清中の孫逸仙がいよいよ二七日上海に着くので彼に会見かたがた出発するのである・・・」国民新聞となっている。又，随行した山本貞美

によれが，中国に渡った頭山のもとえ入れ替わり中国人，日本国士浪人達が面会を求めて来たが，いささかも困惑するちころなく黙々として聞き・・・とある。当時革命の動乱に便乗し功金をむさぼろうとした日本の不良浪人達がいた。頭山はこのことを憂いて万金を散らして配意したとある。頭山は，上海で孫文，黄興らと会っている。その後，犬養，寺尾，宮岐，菅野らと南京へ出向いて孫文に会っている。そこで，孫文に北京へ行けば袁世凱によって暗殺されるかもしれないと忠告している。頭山のアジア主義は「日本は支那と一緒に仕事をせんければならぬ。それには，日本人が日本の衣類を着て支那人の前に立ってもなにもならぬ。日本の優秀な人物はどしどし支那に帰化してしまわねばならぬ。」大西郷遺訓。これが日本と中国の親善だと言っている。頭山は，革命家というより，皆人間として正当の生き方をもつために戦うのであって，日本であれ中国であれ朝鮮であれその意味では同じ立場の考え方である。

3月中旬上海を去って大連に渡り，汽車で普蘭店に来ると「大分広いね，これは日本がとってやらないと，支那じゃあ仕末がわるかろう」と言ったことに尾ひれが付いて，後に誤解されることになる。この言葉だけをとれば誤解されるが，もともと頭山には，蓄財や物的野心はないひとである，満州の大平野があれば，日本人が帰化して開発してあげれば良いじゃないかということだと考える。

辛亥革命は民族革命として一応成功したが，統一を築く段階になると状況が変わってくる。孫文が袁世凱に大総統の席をゆずってからは袁世凱の権力は強化されて，孫文と共に戦った宗教仁は上海で刺客に狙撃されて死ぬことになる。そうして大正2年第二の革命動乱が起こり孫文（広東），黄興（南京），李列釣（九江）らはみな袁世凱に敗れて，日本へ亡命してきた。亡命者は蒋介石なども含めて80余名にのぼったといわれる。しかし，日本政府（山本権兵衛内閣）は袁世凱の方のかたをもって中国革命党に対する態度は冷ややかであった。その理由は，日英同盟にある。政府は英国に中国の立憲君主制を説いたが，英国は内政不干渉の方針で袁世凱の政策をとったのである。

（1913）年袁世凱から追われた孫文から救いを求める電報を受け取った菅野長知は，頭山と犬養に急報すると，頭山は一言「救え」と支持をした。山本総理と親しい犬養は伊豆長岡で静養中だったが急いで東京に戻り，山本総理と交渉の上やっと日本上陸の許可が下りた。そして，孫文は中国からの脱出に成功することが出来た。この事により孫文は頭山の友情に深く感銘し，心から頭山を信頼した。孫文の日本での生活は，赤坂霊南坂の頭山家に半年も居ることになる。（1928）年上海で出版された載李陶の「日本論」の中で孫文の思想について次のように述べている，「民族と国家の間には一定の境界がある。両者を区別する最善の方法は，それぞれを形成する力が何であるか

に着目することである。民族は自然力でつくられたものであり，国家は武力でつくられたものである。中国には，王道は自然にしたがうと言う言葉がある」とあるように，中国人のものの考え方は覇道帝国主義には根底から反対であることが分かる，載李陶は日本政府の対中政策が自国（日本）絶対主義でアジア主義的経綸を持たないことを衝いているのであった。載李陶は孫文の継承者ではあるが，反共産主義者であった。「親交を卑しむ唯物史観では，人生の意義は解明できず，ましてや民族の生存の意義は解明できない。偉大なる三民主義，偉大なる民政史観よ」と云っている。袁世凱は野望のために民族革命（孫文，黄興）を利用し，日本政府は満蒙開発，ロシア南下政策阻止のために袁世凱を利用した，そのためには孫文はじゃまであったから，日本に亡命したときも冷ややかな態度であったが，それに対して頭山は，アジア人民皆兄弟の心で孫文はじめ革命家達を受け入れている，日本政府との違いはこの頭山の徳と心の大きさにあると言える。

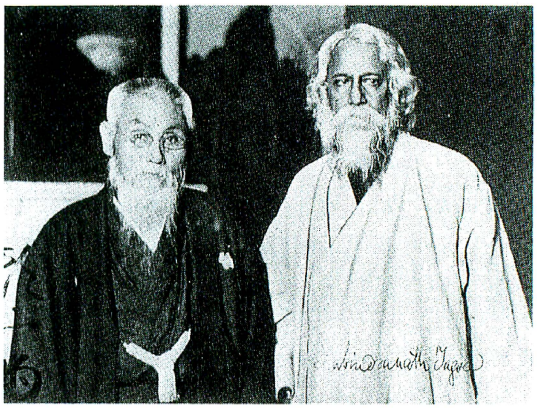
大正3年7月（1914）オーストリアがセルビアに宣戦しヨーロッパ対戦（第一次世界大戦）が始まる。日英同盟の為とはいえ，日本はドイツに参戦した。頭山も「ああ，これはだめだ」と一言いっている。又，加藤高明外相は亦（囲碁）をしらない人だとも云っている。大局を見れない人だと云っているのである。政府はその間対支21ヶ条要求の政策を外交としたために，中国の混乱を一層ひっかきまわし，反日感情は高まる一方であった。頭山は袁世凱の後を継いだ黎天洪大統領の時期における日本政府のありかたには批判的で，むしろ黎天洪に同情を示したと云われる。

大正4年12月インド独立を志す，ピー・ヌ・タクールと，ハランバ・エル・グブタの二人が日本退去命令を受けた。なぜ政府は二人に退去命令を出したかと云うと，英国在住の独の領事館員と長崎において密通しているとの理由であった，これに対して二人は非常に憤慨して「予等が独逸人と関係ありとは捏造も甚だしい。語った当局の姓名が解れば法廷で争う」とまで云っている。これは英国の策略で，政府もこれに応えざるえなくなっていた。そこで，国民党の犬養毅，政友会の麻次竹二郎，衆院副議長の花井卓蔵らが，石井菊次郎外相に善処を申し入れたが聞き入れられず，二人の滞在期間はあと4日と迫っていた。

二人は麻生こうがいの家を出た，三人の刑事が尾行したが赤坂霊南坂で見失ってしまう，そこには頭山の家がある，三人の刑事はうろたえて頭山の家に行き聞いたところ，頭山は，昨晩帰ったと云った，しかし三人の刑事は善処を望んだが証拠はない，そこで頭山は「お前達は良い功徳をしたものだ，お前らは失職してもそれでインド人の命が助かるなら，結果はインド三億の民を助けることになる，大手柄じゃ」と云った。三人の刑事も手のうちどころが見つからず去って行った。真相は，頭山が杉山茂

丸と内田良平を呼び「俺は断然彼等を助けてやろうと思う，そこで彼等を助ける方法だが，俺は無器用で一向そうゆうことにはやくたたぬ，そち共で何とか工夫してみてくれ，その代わり牢には俺が行って座る。これなら俺にも出来る」二人言った。二人に異存がある筈はない。そこで新宿の中村屋（パン屋）にかくまってもらうことにして，頭山家の裏口から連れ出したというのが真相である。その後，二人のうちグブタは中村屋を出て大川周明の所へ移り，後，渡米してメキシコに逃れたと言われている。タクールは本名のラス・ビハリ・ボースなり，中村屋の主人相馬の娘，俊子と結婚して一男一女を儲け，インド独立のために努力を払っている。今日の自由印度独立連盟最高顧問，ラズ・ビハリ・ボースこそ当時のタクールである。ここでも頭山の功績は大きい。

大正6年（1917）3月ロシアに3月革命が起こりロマノフ王朝が失墜し，ケレンスキー内閣になり，さらに1月革命でソビエト政権が樹立されると，ヨーロッパ戦線に変化が見え始めドイツも敗戦の色が濃くなってきた。中国では孫文が広東軍政府をつくり（1917）北京政府と対等のかたちをつくったが，日本政府の北方支援のため一年ともたず大元帥を辞任して又，日本へ来ている。孫文が日本政府に痛めつけられながらも日本に来る訳は，頭山と，その一党の友情を強く感じていたからであろう。又，大正6年7月，玄洋社の社史編纂会が東京牛込に作られ社史を刊行している。この大正6年から8年にかけては多くの右翼結社が生まれている。



頭山満とタゴール（大正13年6月）

例をあげれば，

国士舘は（大正6年）柴田徳治郎によって設立された，このことは第二回に詳しく述べることにして

猶存社は北一輝の「日本改造法案」を大綱として出来た（大正8年）

老荘会は大川周明，満川亀太郎（大正7年）

大正赤心団は森健二（大正7年）

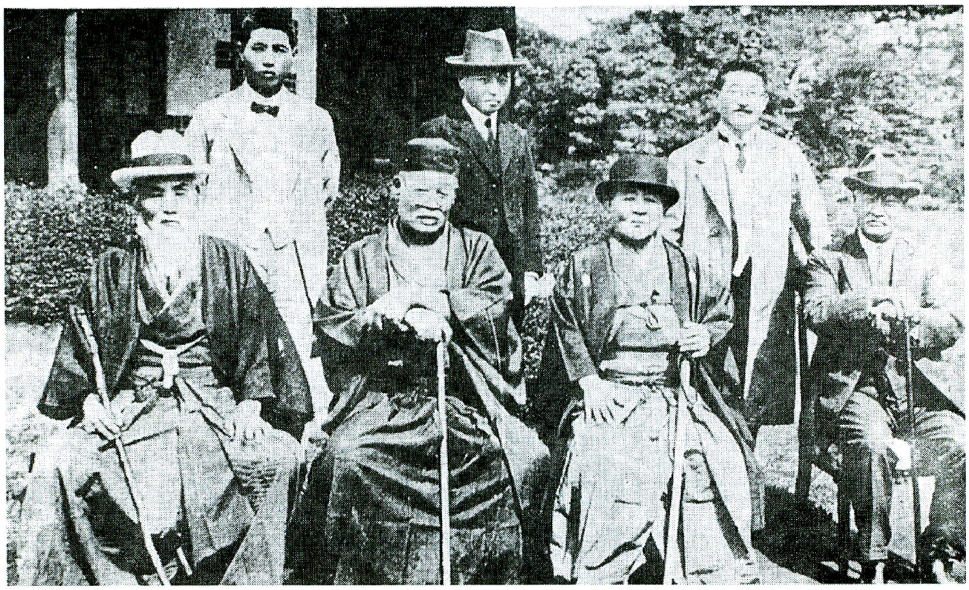
興国同志会は上杉慎吉，天野辰夫（大正8年）

縦横倶楽部は森伝，（大正8年）

大日本国粋会は遊侠結集者，砂小川，西村伊三郎（大正8年）

国家社会党は高亀素之，茂木久平らが（大正8年）に作るが即日禁止に追い込まれ

ている。頭山は大正8年といえば65歳，国粋会の会長に推されるが後援は惜しまぬがと云って断っている。国粋会の規約は「皇室を中心とし善く同志を糾合し国家の緩急に応じて奉公の実を挙ぐることを期す」とうたっている。急進する破壊思想や，社会主義運動の伝統否認に対抗するための手段であった。



国士舘創立に際して 前列左より，頭山満，野田卯太郎，渋沢栄一，徳富蘇峰
後列右，柴田徳次郎

大正9年朝鮮問題に関する相談会がもよわされ，そこから「同光会」という組織が作られた。この時，頭山は適任者がいれば会長は日本内地人でなくても朝鮮人でも良いではないかと云っている。このような発言は，頭山の朝鮮人も日本人も同じ同胞ではないかと思う考えが，この発言に出たと思う。同光会の趣旨は，日韓一帯の理想は「亜州同民族提携の光をなし，以て東洋の平和を確保し世界の文明を擁護せんとするにあり」という趣旨であり，日本と朝鮮を同一民族として結合させようという善意からの発想である。

大正10年9月，安田財閥の創設者，安田善治郎84歳が大磯で神州義団の朝日平吾に刺殺された。大正10年11月には，首相原敬が東京駅で中岡良一に刺殺された。12月になるとワシントン会議において，日本の軍事力拡張を阻止するための会議が開かれた。日本海軍の主力艦保有率は3，フランス，イタリア各1.67，イギリス，アメリカ各5，の割合できまった。又，この会議で日英同盟の廃止，シベリアからの撤退，中国に関する権益の縮小などが決められ，翌年2月6日に条約に調印されている。頭山はこの事について「我が政府が国防の最小限度と称する，七割の主張を六割

に押しつけられたことは非常な屈辱である。又，支那全権に辞任の声明を出したことはどういう心理状態なのか，本来なら六割も七割ない，囲碁で言えば互先なのが至当じゃ，米国は日本に対し都合のいいことばかり決めてしまっているのに，何の抗議もなし得ないことは何事か，これといふのも人心が近来甚だしく米国にかぶれ，金銭崇拝の系町人根性になり，無気力となったからじゃ，こういう風に進んでいっては，何千年来光輝ある日本の前途が気遣われる。」と言っている。頭山が以前から言っていた「米英にもぎ取られる」形と成ったのである。

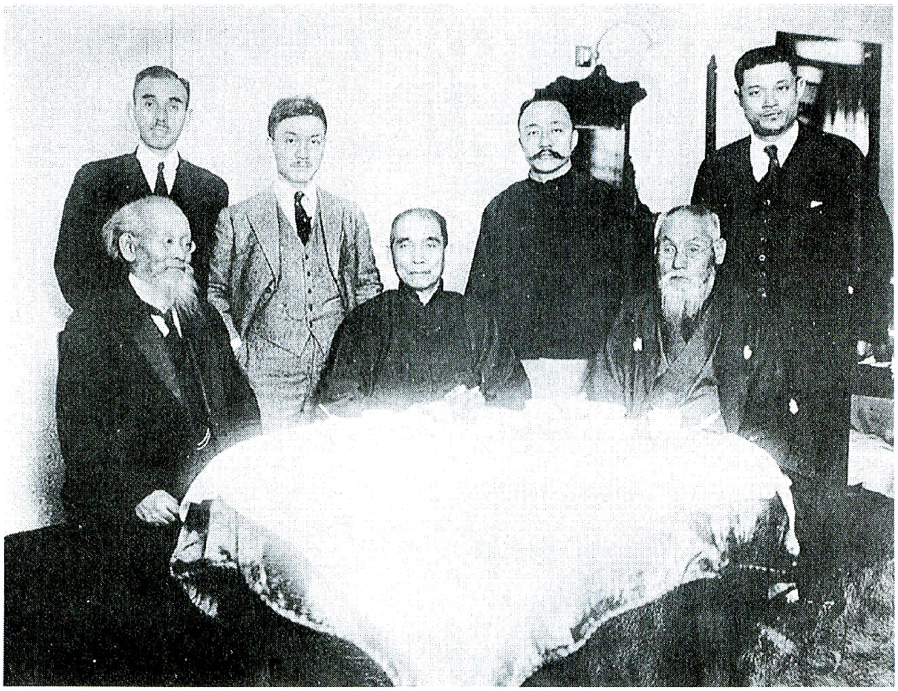
大正11年大隈重信85歳，山県有朋85歳，共に85歳で亡くなり，中国では軍閥闘争が激化し，張作霖と呉佩孚の間に第一次奉直戦争がおこり，中国共産党が対当してきた。又，ソビエト社会主義共和国連邦宣言（12月10日）によって，東アジアの従来のアジア主義に重大な影響をおよぼしはじめた。

大正12年，孫文とアドルフ・ヨッフェは上海において共産主義共同宣言を発表してから広東に行き大総統に就任した。このことで日本国土と孫文との間に流れていた共通のアジア主義の理念は相反していくことになる。アゴルフ・ヨッフェも（1923年2月）に東京にやって来て，国家社会主義運動を展開する。又，コミンテルの影響で日本共産党は地下活動に専念するがこれを政府は検挙し，北一輝はこのような思想に真っ向から戦った。

大正12年9月1日，関東大震災がおこり，東京は火の海となり，死者，行方不明者14万人という被害が出た。赤坂霊南坂の頭山の家も焼けてしまった。その時，頭山は御殿場の山荘にいたため難を逃れたが，その後世田谷の国士舘にいる長男，立助のもとに一時落ち着くことになった。その後，大正13年8月渋谷区常磐松に移りすんだ。頭山も70歳を迎えていた。

激動する中国にあって，孫文は日本にいる頭山のもとを再三訪れている。その目的は，革命党政府の首領である孫文は，中国を欧米の植民地支配からどう解放するかが革命の最大の目標であったが，アジア主義理論で頭山と微妙に食い違っている。この点を分かってもらおうと思ってやって来た。そうして神戸での頭山と孫文の会談の中で，頭山は，日露戦争の生家であると云って，満蒙の権益を永久に確保したいなどと考えているのでは決してない。条件が備われば勿論還付すべきであると名言している。しかし，還付させる条件のない今の時点において，いたずらに日本の国民感情を刺激することの愚かなことを指摘している。頭山自身も中国の還付要求は理解出来るが，今の時点での話ではないと孫文に云っている。李大釗は（1919）年マルクス主義代表としてアジア主義は日本帝国主義の侵略と決め付けているが，三民主義を唱える孫文は帝国侵略主義とは云っていなかった。神戸での三民主義講演で，孫文はこう語って

いる。「この日本が富強になりえたということは，アジアの各国に，限りない希望を生み出した。そして，いまの安南やビルマと同じであった日本の以前の国力も，いまでは安南やビルマなどとはくらべものにならなくなったということを感じた」といい，日本を学ぶ意味はそこにあると云っている。その後，孫文は，大正14年（1925）3月ドイツの病院で肝臓病で亡くなった。頭山は，犬養毅，渋沢栄一らと共に芝増上寺において，孫文の追悼会を行っている。



神戸オリエンタルホテルにて 前列右から，頭山満，孫文，大久保高明
後列右から，藤本尚則，李列釣，戴天仇，山田純三郎（大正13年11月25日）

大正14年玄洋社社長，進藤喜平太が76歳で亡くなり，国会では普通選挙が衆議員を通過し，又，治安維持法が成立した。黒竜会は家長選挙の主張を続けていたが，内田良平は，加藤高明暗殺計画に関係あるとされ入獄されていた。頭山は同郷の中野正剛に，政治家として期待をかけるが，資本主義経済の行き詰まりと，不況下において，製鉄事業や自動車産業を主とする経済の動きによって，軍国主義の大陸政策とか，対，世界の外交とからみあって，政治経済状況は激動時代えとなっていく。昭和になると，新しい政治的軍国主義が台頭してきて，玄洋社や，黒竜会のような国権論結社が，政府国権構造から離れていくことになっていく。頭山は，このような時に，神社参拝で各地をまわってる。晩節を汚す権力者とは違い，頭山の生涯は宇宙の一を離れずの信条であったと云われている。ある日，湊川神社に参拝した時，玉垣にうずくまって慟

哭したと云われる。

昭和16年，頭山87歳の年に長男立助が亡くなった。次男泉，三男秀三は健在であったが，三男秀三は五・一五事件の関係で入獄され，釈放語も国家運動に参加する。日本は，昭和16年12月以降第二次世界大戦の戦況がしだいに形勢不利になっていく。昭和19年になると戦況は益々悪化していく。昭和19年の戦況を当時の朝日新聞から拾いあげてみると，

昭和19・1・10　東部戦線のドイツ軍全面撤退
昭和19・2・5　マーシャル両島に米軍上陸
昭和19・2・20　東条内閣4回目の内閣改造
昭和19・2・22　米機動部隊，トラック島襲撃
昭和19・3・22　インパール作戦開始
昭和19・6・7　連合軍，ノルマンジー上陸
昭和19・6・17　サイパン島攻防戦始まる
昭和19・6・17　B29，九州北部を初空襲
昭和19・7・19　サイパン島守備隊玉砕
昭和19・7・21　東条内閣ついに総辞職
昭和19・7・23　小磯，米内協力内閣が発足
昭和19・8・13　インパール作戦失敗
昭和19・9・21　雲南の日本軍全滅
昭和19・10・1　グアム，テニヤンでも玉砕
昭和19・10・29　海軍の神風特攻隊出撃

と，いうように戦況が著しく悪くなる中で，頭山は昭和19年10月5日，御殿場の山荘において90歳の生涯を閉じた。戒名は，大光院殿威誉慈山立雲大居士とあり，福岡市の宗福寺に永眠している。又，玄洋社の機関誌も昭和19年10月15日，第103号をもって廃刊となっている。

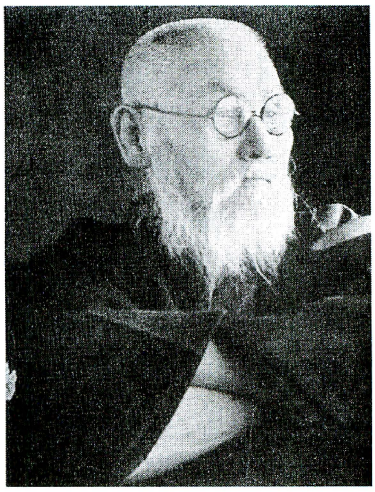
頭山は，条約改正には猛然と反対し，日清日露戦争に義勇軍を送り協力し，隣国朝鮮の同志を助け，中国の民族革命者を支持し，アジアの国士たちを支援し，皇室の信を貫きとうした大丈夫である。

あとがき

現在の日本の政治をみるとき，明治期の藩閥政治と同じような状況と思われる。派閥に振り回され，官僚の云うがままで，国民の望んでいる政治は行えず，改革，改革と言っているが日本をどのように変えていくのかビジョンが見えてこない。自虐支観

的でことなかれ政治が，今の弱腰外交になっている。国際問題を取り上げれば，

ロシアとの北方領土問題。ロシアは二島（歯舞，色丹）は返すが，日本政府は四島一括返還を主張している。もともと平成3年（1991）ゴルバチョフ訪日から始まって，平成10年（2001）　エルツエン，橋本会談で，日本側は択捉島とウルップ島の間に国境線を引いて平和条約を締結し，現実の返還については別途協議しようとなっている。日本政府はそのままの主張を続けていったら良いと思う。



頭　山　満　翁

中国，台湾との尖閣諸島問題。もともと日本の島だとする証明は，大正9年（1920）中華民国から沖縄県石垣村に宛てた手紙に，「日本帝国八重山郡尖閣列島」なっている。又，台湾は昭和46年（1971）尖閣諸島を日本名の「魚釣島」から「釣魚台列島」と台湾名に改めている。このことは，（1968）年に尖閣諸島海域に原油，天然ガスが埋蔵されていることが分かってから，中国，台湾は領有権を主張し始めていることが明らかであり，中国の日本に対する国家戦略に政府はどう対応していくのか。

韓国との竹島問題。島根県は県議会で「竹島の日」を制定した。そうしたら速，韓国政府は日本政府に抗議の声明を出した。又，対馬までも韓国領とする対馬の日を逆につくってしまった。日本の中学校教科書に「竹島は日本固有の領土で，現在韓国に占領されている」と記述すると速抗議，今では島根県の漁師は近くまで行って操業出来なくなった。いったい誰の責任だろうか。

北朝鮮による拉致問題。北朝鮮は，横田恵さんの遺骨を本人のものであると偽って日本政府に提出した。父滋さん，拉致連の西岡力さんは，北朝鮮に誠意がない場合，経済制裁に踏み切ってもらいたいと，再三，政府に陳情している。当然，拉致被害者全員の生命に関わる問題で身を切られる思いであろうに，政府は6ヶ国協議に気兼ねし先延ばし外交を続けている。２０年も前から分かっていることで，今やることがあるだろう，シジミとアサリを食べなければ事足りる問題ではない。6ヶ国協議をボイコットしてでも，政府としてやれることをやれば，日本国民の大半は拍手喝采するんじゃないかなぁ。

中国からの靖国神社参拝問題。もともと，サンフランシスコ平和条約（講和条約）で日本が独立を回復した直後は昭和天皇は参拝していた。その当時は中国も何の批判

もせず20年前から批判を始めた。それは，東京裁判に始まるわけだが，日本を裁いた5ヶ国（アメリカ，ロシア，イギリス，フランス，中国）はその後資本主義国家と共産主義国家に分かれ，最近まで東西の冷戦が続いたではないか，その責任の一端は独裁共産主義国家中国にある。その中国にA級戦犯などと言われる筋合いはない。日本政府も，昭和28年8月3日の閣議において戦犯と言う言葉は使わない。「公務死」と言う言葉に変える事を決定している。又，中国は反日教育をずっと続けてきているのに日教組は「日本は悪い国だ，中国を侵略したんだ」と教え込んできたから，中国から批判されても日教組教育を受けた世代人は当然だと考えている。中国の批判は内政干渉であり，政府は国民を代表して堂々と公式参拝をやるべきである。

台湾の独立問題。中国の全人民大会で，反国家分裂法案が満場一致で採択された。台湾の独立を武力を持ってでも阻止しようとする考えである。今では，台湾海峡に550基の弾道ミサイルを配備し，潜水艦の配備を進めている。日本政府は，中国に気兼ねして台湾の独立は支持しないとの声名を出しているが，台湾はシーレインに位置し，日本にとっては大事な生命線であり，中国に併合されれば日本は中国の支配下に置かれてしまう。又，台湾が新憲法をつくって中国から独立したら日本政府は台湾に対してどう対処するのか。独裁政権の中国帝国主義を応援するのか，民主国家台湾を応援するのか，頭山翁だったら言わずとも知れたことだろう。国民の生命と財産を守る立場の日本政府は，山積みされた国際諸問題に対して，毅然とした態度で対処してもらいたいと希望します。

参考文献

長谷川義紀　頭山満評伝
藤本尚則　巨人頭山満
未定稿　頭山満翁正伝
吉田・明　巨人頭山満は語る
平井駒次郎　頭山と玄洋社物語
石滝豊美　玄洋社発掘
古島一雄　間寸観
立雲頭山満講述　大西郷遺訓
藤本尚則　頭山精神
内田良平　露西亜論
幡掛正木　玄洋社社史